

## 還 曆

小林 守

時は満ちて滝となり

刻まれた心という字を

消していく波

打ち返す潮の攻勢を

ご破算で願いましたは

永遠の今よ 心地よく

やがて誤算に

還曆は引き潮だった

底に積もる芥もくた

宛名を探り出し ファイルを開き

打ちあがってきた蟹や貝殻を標本にし

海草や流木を拾い

それらで言葉を紡いでいく

海鳥の鳴いている引き潮

遠のいていくブイ

午後の光を曳いておちる波頭

退いていく人の影

内臓の壁が開かれ

棲みついた虫けらが

うごめいてひび割れ

閉ざされた浜辺に

わたしの遺曆は

痛むことから始まった

稜線が闇の輪郭を星空に描く

生ぬるい風が麓から吹き上げてくる

ぼくはもう一度

獣を連れて

この頂から降りていこう

明滅する蜚

小さなサヨナラがひしめく街

ぼくはもう一度

麦わらをかぶり

寡黙に魚を狙う少年に会うため

この尾根の円環を上っていこう

ここは古い松枝のしがらみ

風に這いつくばる季節が

いつも間近にあるのだ

ダイヤモンドダストは

森の死神

重力を失ってみれば

上るも降りるも同じこと

位置を変え 時空の枠を

星空の下に

広げてみるだけ

あの明滅はヘッドライト

テールライトも同じこと

曲線の流れを追い 交差点に立ち

蛸を追って出て行ったまま

行方不明になっている

NやKに出会うのだ

銀河を超えてくる星の明滅

とても及ばぬ六〇年の明滅でも

その行方を見届けるため

ぼくは交信を続けよう

還暦を迎えた男と女が

息苦しい繁殖の夏を

まだチロチロと燃やしている

元気かやー どーしてる

じゃーまたいつか

（ こねっきりでも ）

いじましく

遺伝子にしたがうように

ぼくは小さな円環を戻るのだ

「おーかん」が往還という

仏教語とは知らなかった

行くだけの道は往還道ではない

「おおかわ」「おおみち」

「大（空）間」が入り混じって

大人がわたり 死んだりする

危険な空間の音色がした

おーかんが県道になったのは

祖父母が死んで

子供らが京浜地区へ

集団就職するころだった

メグロ・ヤマハのオートバイ

スバル・パブリカが

走り出したころだった

大雨には水があふれ

雪の日は畑も田圃も見分けがつかず

キャンデー売りや紙芝居

たまにはチンドン屋もきて

鉾山のマンガントラックが

土煙立てて行き来した

蛇やトカゲがゆっくり横切り

イナゴやバッタ・蝶々が

道端を少し入れば 野糞もあって

道草するのが人生だった

「おーかん」には行きと還りの相が在る

「おーかん」が往還相の

仏教語とは知らなかった